

薄井憲二バレエ・コレクション常設展

vol. 73

『カエルのバレエ入門』

展示期間 /

2019年4月24日(水)～6月18日(火)

(※ 休館日はwebでご確認ください)

企画・構成 /

関典子(薄井憲二バレエ・コレクション・キュレーター)

今回は、少々風変わりな本をご紹介します。『カエルのバレエ入門』という絵本。1979年、ドナルド・エリオット(1928～)とクリントン・アロウッド(1939～)によって、アメリカで出版されました(シリーズ作として『ワニのオーケストラ入門』(原著1976/訳著1983)も出版されています)。1983年には、日本での翻訳版が出版されました。訳者は、薄井憲二氏(1924～2017)と、その師・蘆原英了氏(1907～1981)、日本バレエの創成期を担った第一人者が手掛けています。「はじめに」では、バレエの技術の基本が紹介され、その後、ポーズや動きなどの個々の技術のイラストと解説が続きます。右面に優雅にポーズをとるカエルたちのイラスト。左面の解説は、非常に本格的であり分かりやすく、ユーモアや皮肉も交えられています。

しかし、なぜまた「カエル」をモデルにしたのでしょうか? その意図について、「バレエに対するみなさんの興味をかきたて、さらに、両棲類無尾目の優雅さ(カエルが優雅ですって、まさか!?)を発見できるようにえがかれたものです」と書かれています(画家アロウッドの飼っているアフリカガエルの「ガラテア」が、「さまざまな踊り手にふんし、もんくもいわずにモデルをつとめてくれ」たそうです!)。最後の「ちょっとまじめな解説」では、「芸術は崇高であり、同時にこっけいでもあります。人生の一方の側しか見ない人は、半分の人生しか送っていないのです」という金言も。楽しいイラストを愛でながら絵本をめくっていくうちに基礎知識が得られ、同時に、芸術、精神、人生、哲学についても考えを広げてくれる、とっても素敵な一冊です。

目次

【はしがき】

【はじめに】

【第1部 ポジションと動き】

「5つの基本ポジション」(第1～第5ポジション)

「バーおよびセンターでおこなうポーズとパ」(プリエ、アントルシャ、グラン・ジュッテ、パ・ド・シャ、カプリオール、パ・パロネ、アティチュード、アラベスク、デヴロップ)

「パ・ド・ドウ」(ピルエット、アラベスク・パンシエ、グラン・ジュッテ、プティ・バットマン、アティチュード、パ・ポワゾン)

【第2部 カエルのバレエ団】

「終幕の挨拶—ブラヴォー!」「プリマ・バレリーナ」

【ちょっとまじめな解説】

「歴史の体系」「動きとリズム」「崇高さとこっけい」

『カエルのバレエ入門』「はじめに」より

—すぐれた芸術は、たいていの場合、技術と芸術的感受性が組みあわさって作られます。表現手段をしっかりとつかみ、それを使いこなす力を持つことと、表現すべきなものかをもちあわせていることの両方がうまくとけあわなければなりません。技術だけでは何ものも生みださない技巧にすぎません。また、芸術的感受性、芸術的感覚だけでは、伝達的手段とはならず、心理や目を、むなしくかいま見るだけにおわってしまいます。この二つは、おたがいにおぎないあいながら同時に存在していなくてはなりません。そしてこの関係がかんぺきにいはじめ、偉大な芸術が生まれるのです。(中略)

動きの芸術であるバレエを、図でえがこうというのは、むずかしいことです。図として凍結した瞬間から、動きつづけ変わりつづける動作の全体を想像できるような感覚が必要になるのです。また、私たちがバレエの動きをしめすものとして、人間という動物をえらばなかったことにみなさんが気がついてくださるとき、もっと豊かな想像力が必要になってくるでしょう。生まれつき、とんだりはねたり身体をのぼしたりすることに、人間よりも適した生物が、何とか人間よりうまく、そしてずっと真剣に、これからあとのページで躍動いたします。

(中略)人間の踊り手であろうとカエルの踊り手であろうと、完成されたものの中からと同じように、未完成なものなかからいくばくかの長所をひろいあげてやろうという気になって、このあとの部分につきあっていただけるといいと思っています。

出展資料

◆ 絵本『カエルのバレエ入門』(BK-0925-tec)

文：ドナルド・エリオット 絵：クリントン・アロウッド

訳：蘆原英了 薄井憲二

《原著》アメリカ・Gambit Inc. 1979年

《訳著》日本・岩波書店 1983年



兵庫県立芸術文化センター

〒663-8204 兵庫県西宮市高松町2-22

tel: 0798-68-0223 fax: 0798-68-0212

※ 禁無断複製・複製・引用